

## 「どきっ!」とさせる『徒然草』

昨日今日と職員は届け物をかねて、生徒の皆さん宅を訪問しています。これが以外と大変なんです。なにせ、瑞浪市の総面積の七割が北中の校区ですからね。荷物を積んで移動し、顔や声を確認して一日中学校をぐるぐると。昨日だけで百キロ近く車で走った職員もいます。

でも、みんな楽しそうでした。やはり生徒がいるからこそその学校。生徒に会えると言うだけで、職員は荷物のお重さや距離や時間は全く気にならないようでした。

さて、今日は二年生の皆さんに書きますね。再来年のことですが、高校入試がありますよね。入試制度が変わらなければ、公立高校受検の場合、一次選抜と二次選抜の二回のチャンスが皆さんにはあるわけです。

もし一次選抜だけだったらどうですか。つまり、一発勝負。チャンスが一回ということは、精神的なプレッシャーが比べものにならないくらい大きくなるのではないかな。

第一希望の高校に合格したいという気もちはだれも一緒。その一方で、二次選抜があることによって、「高校に行けないことはない」という小さな小さな安心感が心に生まれるかもね。「一次がだめだったら二次がある」というように、「くがだめだったらくがある」という考え方は、プレッシャーを解消してくれるように思えます。

「それがだめなんだ!」

鎌倉時代の随筆『徒然草』の作者兼好法師は、作品の中でこう言っています。皆さん、「どきっ!」としませませんでしたか。彼は次のように続けています。

「初心の人、二つの矢をもつことなけれ。後の矢を頼みて、初めの矢に等閑(とうかん)の心あり。」

弓の初心者は、二本の矢をもってはならない。二本目の矢をあてにして、一本目の矢をいい加減にしようというのです。確かに一理ありますよね。「次がある」という気もちが、油断や樂觀につながってしまうのです。

同じ随筆の平安時代『枕草子』とは、性質が全く違います。『徒然草』では、人間の弱さとか醜さを教えてもらっているような…お坊さんの説教を受けているみたいです。

そうなんです、作者は兼好法師。お坊さんなんですよ。教科書に載っている「仁和寺にある法師」を読んでください。これまた、どきっとするはずですからね。(どきっとなかった人は授業でね!)

(五月八日 記)